

交流協定校ラヴァル大学との学生交流について

京都府立大学国際交流委員会委員 生命環境科学研究科 助教 長島 啓子



目次

- 1 交流協定校ラヴァル大学との学生交流について
- 2 学生レポート
- 3 レーゲンスブルク大学における在外研究
- 4 国際交流協定校交流便り
イベントレポート

本年は国際交流協定を結ぶカナダ、ラヴァル大学と初めて学生交流を実現した、画期的な年となりました。本学とラヴァル大学は共同研究などによる研究者交流、学生交流を目的に、2010年に学術交流協定を結びました。昨年まで毎年1-2名のラヴァル大学の研究者が本学を訪れ、シンポジウムなどを通して、カナダおよび日本の森林・林業について情報交換をしてきました。と同時に学生交流の実現に向けて、計画を練って参りました。

ラヴァル大学では、毎年2週間ほど学生の海外研修が実施され、本年はその目的地として日本が選択されたことから、5月に8日間に渡ってラヴァル大学森林・地理・ジオマテックス学部の学生の日本訪問研修が実現しました。そして、これを機に、本学森林科学科の学生のカナダへの訪問研修団を受け入れて頂ける運びとなり、9月に10日間に渡るカナダ訪問研修が実現しました。

5月の日本訪問研修、9月のカナダ訪問研修の双方の計画は、受け入れ側の教員が訪問・研修先の計画を提案し、訪問側の参加学生が計画の内容を確認、要望などを加え、決定されました。滞在場所はなるべく低価格になることをめざし、受け入れ側と訪問学生で炊事することも多くありました。しかし、これによって、各々の国の家庭料理を味わうことができ、大変よかったですと思っています。訪問前には、訪問先の文化、森林、林業について事前にある程度理解するために、勉強会も開催しました。特に9月の本学学生の訪問研修の勉強会は参加学生が与えられたテーマについて調べ、それを英語で発表することで、英語で「聞く」「話す」練習を実施いたしました。

5月のラヴァル大学学生の日本訪問研修では、ラヴァル大学の学生8名に加え、本学学生からも参加者を募り、一緒に訪問研修に参加してもらいました。森林科学科の教員・学生の参加による大野演習林での1泊2日の歓迎研修をかわきりに、奈良の春日山における照葉樹林、大台ヶ原における冷温帯林およびシカの食害の植生への影響と植生回復の試み、三重県大台町における林業の新しい取り組みなど、バスで移動し、現地ではトレッキングをしながらの研修となりました。ラヴァル大学の学生からは、シカによる被害の大きさに驚くとともに、日本の

林業についても積極的な質問が見られました。参加していた本学学生にとってもなかなか見られない森林管理の現場見学ということで、非常に充実したものとなりました。

9月の本学学生のカナダ訪問研修では、ラヴァル大学を訪問。広大な敷地に木がふんだんに用いられている校舎、スポーツセンターなどに圧倒されました。その後、国立公園にてカエデやカンパ類からなる広葉樹林、トウヒやモミから成る北方林、高標高地でみられたツンドラなど、様々な植生タイプを目にしました。また、resoluという世界有数の企業が管理をしている林業の現場も見学。なだらかな地形で24時間伐採作業を実施している現場は、何もかもスケールが大きく、カナダ産材の国際市場における競争力の高さの所以を理解する一コマでした。ラヴァル大学の演習林にも訪れ、ムースなどの野生動物も目にするのと同時に、生態学的な知見をも活かした森林管理の実践に、強い興味を持ちました。

ラヴァル大学の学生を受け入れる際に大変であったことは、やはり滞在先の手配です。人数が多いため、低価格で宿泊できる施設を探すのに苦労をしました。本学学生のカナダ訪問研修では、参加したいにもかかわらず、予算的に参加が難しかった学生がいたことが残念でなりません。また、学生の訪問研修の準備として必要な事項を記したマニュアルなどがなかったため、緊急時の連絡体制や海外旅行保険に必要な内容など情報集めに苦労をしました。ラヴァル大学の日本訪問研修、本学学生のカナダ訪問研修、いずれも準備に大変な労力がかけられており、特に森林計画学研究室の学生に多大なる支援をいただきました。学生の皆様の支援により、ラヴァル大学の日本訪問研修と本学学生のカナダ訪問研修を実現できたと言っても過言ではないと思っております。ここに厚く御礼申し上げます。

大学の国際化も叫ばれる昨今、本学においても国際的な知見を養う場を求める声も聞いております。ラヴァル大学の日本訪問研修および本学学生のカナダ訪問研修の参加学生の成長した姿を通じ、国際的な視野に立ち知見を深めるため、学生交流ができる場を継続的に設けることの重要性を再確認しました。カナダ訪問研修の折、ラヴァル大学と今後益々学生交流を活発化させたいという先方の意向も聞いております。多くの学生に経験の場を与えるためにも、今後の継続的な学生交流を目指し、国際交流の体制づくりを更に充実させていきたいと思っております。

ラヴァル大学学生来日レポート

A trip WAY beyond anything I had expected

Université Laval's Marie-Hélène Sauvé



When I learnt that this year, Université Laval's trip was in Japan, I thought "why not?" so I joined in. I am an opportunistic traveler, so I go where I have the opportunity to go. Nevertheless, what I saw during my trip was WAY beyond anything I had expected I first saw people. A lot of people. Then I saw culture; a colorful, respectful and peaceful culture which is so different from Canadian's endless and breathless days- always running one way or the other. Japanese are also sometimes in a hurry, but they seem to know how to relax with tea ceremonies, meditation time, tea time and so on. Then, I saw forests. I saw steep slopes bursting with forests definitely ready to be logged. I saw regeneration issues related to the deer, a problem that would surely be Quebecor's pleasure to take care of... Quebecors like to hunt... especially deers. I saw issues related to the lack of new forest workers, exactly the same issue that we currently have in Québec. I saw so many things that are similar to Québec's forestry and so many contrasts simultaneously. I truly enjoyed my trip to Japan and dearly wish to come back.

ラヴァル大学派遣留学生レポート 生命環境科学研究科環境科学専攻 修士2回 石橋早苗
カナダ・ラヴァル大学学生交流体験レポート

私はカナダのケベックシティでの研修旅行を通して、特に「恐れずに飛び込むことの大切さ」、そして「井の中の蛙であることはもったいない」ということを感じました。

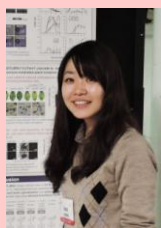
出発前は、カナダの自然と林業に直に触れることができることを楽しみに思う反面、英語を上手く話せるかどうかという不安もありました。しかし、その心配は杞憂でした。カナダに来た当初は、英語を聞き取ることも難しくなかなか積極的に話しかけられませんでした。カナダの人々と毎日会話する内に、徐々に自分から話しかけられるようになりました。うまく話そうとするよりも伝えようとする気持ちが大事だと感じました。また、私は今まで日本の林業にしか目を向けていませんでした。しかし、今回カナダの林業について学び、カナダと日本の林業の規模の大きな差に驚くと共に、国によって全く異なる手法で林業が行われていることを知りました。林業について学ぶ中で、いつしか日本の林業はこういうものだという固定観念に縛られていましたが、今までに目を向けていなかった海外の林業を知ることで、もっと別の手法もあるのではないかと考えるようになりました。10日間という短い期間でしたが、この経験は私たちに一生忘れられないものとなりました。

最後に、私たちにこの研修旅行に参加する機会を与えて下さった長島先生や、多忙な時間の中、私たちのために尽力して下さいましたラバル大学のナンシー先生や学生さん方、見学先で私たちを案内して下さいました方々に心より感謝申し上げます。

米国遺伝学会「優秀ポスター発表賞」受賞者の声 生命環境科学研究科2回 深田 史美

受賞題目「*Colletotrichum orbiculare* regulates cell cycle G1/S progression via twocomponent GAP and GTPase to establish plant infection」

第28回 菌類遺伝学会体験記



私は2015年3月17日から22日の6日間、アメリカ合衆国カリフォルニア州パシフィックグローブにて開催された第28回菌類遺伝学会に参加しました。本学会は1千人規模の菌類研究者が参加する大会であるため、病原糸状菌の細胞周期と病原性に関する新発見をアピールする絶好の機会と捉え、ポスターの表現や説明に準備を重ねて臨みました。その甲斐あってか、有難いことに3時間のポスターセッションの時間は絶えることなく、多くの人に来て頂き、充実した議論を交わすことができました。そして幸運なことに662題のポスターの中から6題の学生優秀ポスター発表賞に選ばれました。それまでは短期留学や国際学会の経験から科学の中心軸は欧米にあるということを感じ、欧米の文化が主流を作っているコミュニティの中に日本人が入っていくのは相当難しいと、気後れも感じていました。サイエンスは努力や研究内容で勝負ができる世界ですが、やはり環境や人とのコミュニケーションが重要な世界であることも事実です。そのような中で、歴史あるこの学会において日本人で初めて、今回の学会ではアジアから唯一の受賞となりました。受賞後、韓国の著名な先生から「アジアの代表だよ」とお声を頂いたときには思わず、涙してしまいました。精一杯、地道に取り組んできた自分の研究を海外の研究者に評価してもらえたことが非常に嬉しく感じました。是非、勇気を出して海外に出て、本場の世界に足を踏み入れ、サイエンスの醍醐味を味わってみませんか。

レーゲンスブルク大学における在外研究

文学部 教授 青地 伯水

ドイツの文豪ゲーテの『イタリア紀行』が、どの街から始まるかご存じですか。この書物は、1786年9月4日レーゲンスブルク滞在から始まります。ゲーテはカールスバートを出発してレーゲンスブルクを足がかりに、イタリアへと向かいました。今は土産物屋である、ドナウ川沿いの壁にこのゲーテの宿泊を記念するプレートがはめ込まれています。

世界遺産都市レーゲンスブルクとの私の出会いは、2011年3月にさかのぼります。本学文学部の現在共同研究員である倉田勇治先生が、外国語コミュニケーションセンターの「外国語としてのドイツ語科」科長トーマス・シュタール博士を紹介するために、私をかの地に連れてくださいました。それ以来、サマーコースへの本学学生の参加（既に100名近い学生が参加しました）、シュタール博士の来学・講演・集中講義、協定締結とトントン拍子に交流は進み、来年度からは本学在学期間内の学生の中期留学（5ヶ月間）も実現するはこびです。

さて、今回の在外研究では、手順前後のそしりを甘んじて受けませんが、2014年3月に翻訳を上梓したヴォルフガング・ヒルデスハイマー『マルボー ある伝記』の主人公の足跡をたどることも目的のひとつでした。2014年10月23日、ゲーテのひそみに倣って、レーゲンスブルクを、ただし鉄道で出発して、イタリアへ向かいました。ミュンヘン行きの電車が天候不順のため22分遅れ、ボローニャ行きの電車との接続時間が23分。ホームからホームへと他の客たちと猛ダッシュ。間に合ったと思いきや、あとの電車も10分ほど遅れて出発し、一路イタ

リアへ。

朝から小雨交じりで、空はどんよりと曇っていましたが、オーストリアのインスブルックあたりから徐々に雪まじりとなりました。ブレンナー峠に來ると吹雪で一面銀世界です。小説の主人公マルボーは11月半ばに吹雪のなか、馬車でアルプスを越えますが、この日は10月末だというのに、真冬です。ところがアルプスのトンネルを抜けてしまうと、春と見まがう陽光です。もちろん秋に逆戻りなのですが、一面のブドウ畑はまばゆいばかり。真冬のアルプスの向こうには、太陽の国が広がっていました。これこそマルボーが、そしてゲーテが憧れを抱いたイタリアだと実感できました。

ドイツの冬は寒いです。ドイツ南東部、内陸に位置するレーゲンスブルクでは、雪はそれほど降りません。しかし一日中零下のことも珍しくはありません。ですから1月半ばから、2月の初めまで、ドナウ川にかかるヨーロッパ最古の石橋のうえにも、市立公園の地面にも雪はとけずにあります。そんな寒い地だからこそ、ドイツ語教育の研究会に出席させてもらったり、図書館で文献を探したり、自宅でゆっくり本を読んだりするには、最高の環境でした。2014年度後期、長期研究専念期間をいただき、レーゲンスブルク旧市街の中心部にある大学のゲストハウスでの5ヶ月間の生活は、なにもものにも代え難い充実した体験でした。私の不在のあいだ、空いた穴を埋めてくださった京都府立大学教職員すべての方に、この場を借りて御礼を申し上げます。ありがとうございます。



在外研究員制度による長期研究専念期間について

本制度は、本学教員が1年又は6ヶ月の期間、外国等において研究に専念できる環境を整備するために、在外研究員制度の特則として、平成25年の9月30日に創設された制度です。従って、長期研究専念期間中は、原則として、教育や大学運営に関する業務は免除されます。これを補償するために必要な場合は一定の範囲内で授業を代替する非常勤講師を雇用できることを定めています。

この制度の利用を申請するための資格としては、京都府立大学の専任教員（教授、准教授、講師、助教）であること。本学に採用されてから5年以上が経過していることが必要です。また、機会均等、成果の還元、若手優先の観点から、長期研究専念期間を利用してから7年以上経過していること。長期研究専念期間取得後1年以上本学で勤務ができること。取得の始期においておおむね50歳未満であることもあわせて定められています。

定数については、文学部及び公共政策学部が前後期いずれも1名1以内、生命環境科学研究科2名以内です。

対象者の選考については、基本的に各学部の教授会にゆだねられていますが、長期研究期間終了後およそ1年以内に論文、学会発表又は書籍の刊行などにより研究成果を対外的に公表できる研究計画であるかどうかを考慮して選考を行うことを定めています。

本学の学術的研究水準の向上のために、この長期研究専念期間が有効に活用されることが期待されています。

国際交流協定校 交流便り



第2回 タデウラコ大学（インドネシア）

JSPS 二国間共同研究の実績

生命環境学部 教授 椎名 隆

タデウラコ大学は、インドネシアのスワラッシ島中部の国立大学で、農学部、自然科学部、医学部など10学部を擁する総合大学です。本学とタデウラコ大は2013年に学術交流協定をむすび、カカオの研究を中心に共同研究を進めています。実はインドネシアは世界第3位のカカオ生産国で、スワラッシ島が最大の生産拠点なのですが、小規模農家による栽培が中心で、病虫害や樹の老化など多くの問題を抱えています。2011年、本学に滞在経験のあるSuwastika講師から、カカオの生産性を高めるためのDNA研究に協力してくれないかという申し入れがありました。基礎的な分子生物学を専門とする私たちが、農学研究で何ができるか正直わからなかったのですが、まずはカカオを見ないことには話が始まらないと現地を訪ねてみました。行ってみると、カカオの多様な地域品種があり、品種によりフルーツの大きさや数、耐病性などが大きく異なることがわかりました。また、幹や枝から直接咲いているカカオの可憐な花にも魅せられました。すぐに、DNAマーカーを使い優良品種を選別することから研究をスタートさせようという話がまとまりました。一方、研究には先立つ資金が必要です。そこで、JSPSの二国間共同研究に申請することにしました。二国間共同研究では、日本側と相手国側で、それぞれの研究計画を個別に提案する必要があります。現地で農学的評価を主に行うインドネシアチームと、遺伝子分析を担当する日本側チームを組み、相互に行き来することで総合的な農学研究をするプロジェクトを提案したところ、幸いなことに採択されました。年に数度、双方の研究者が行き来することで、スワラッシ島独自の優良品種を選抜する共同研究を進めています。さらに、樹木学の松谷先生や、果樹園芸学のクルス先生の協力も得て、土壌のメタゲノム解析などの新しい研究展開も目指しています。

タデウラコ大総長のBasir先生は、「これまで海外の大学が主導するフィールド研究が中心だったが、今後はタデウラコ大が主体的に取り組む国際共同研究を積極的に進めていきたい」と言っています。本プロジェクトでは、総長の意向も受け、両大学が対等な立場で共同研究を進めています。また、インドネシアの学生が日本で分子生物学を学んだり、本学学生がインドネシアでの農学調査に参加するなど、学生の教育活動も活発に行っています。共同研究を始めて3年、タデウラコ大は立派な国際交流施設やメディアセンターなどを建設し、国際共同研究を強力に推進しています。今後も、タデウラコ大との共同研究を積極的に進めていきたいと思っております。

留学生対象 和食お料理教室を開催しました。 6月の和菓子～水無月～



平成27年6月25日（木）に京都府立大学国際交流委員会と京都和食文化研究センター共催で留学生対象和食お料理教室を開催しました。留学生4名と日本人学生3名の参加者がありました。作成したお料理は、6月の年中行事にちなんだ水無月です。水無月は6月30日に行われる夏越（なごし）の祓いという行事と関わったお菓子で、京都では6月に食べるお菓子として広く広まっています。貴族たちが氷室に氷を蓄え夏に涼を楽しんでいたのに対して、庶民たちは氷に見立てていろいろに魔よけの意味のある小豆を浮かべたお菓子を食べていました。

今回は、京都和食文化研究センターの山下満智子先生にご指導いただき、薄力粉や米粉を混ぜていろいろを作成、甘納豆を浮かべ、試食しました。宇治で用意した煎茶の入れ方も教わりながら、お茶の葉を用意し、丁寧にお湯を入れて、みんないただきました。

日本人学生・外国人留学生は日本語や英語で会話を楽しみながら日本の和食文化を体験しました。

日本文化を外国人留学生に伝え、日本人学生と外国人留学生の交流の場を設けることに意味があるのではと思います。

発行日 2015年10月

発行責任者 国際交流委員会委員長 川瀬光義
〒606-0823 京都市左京区下鴨半木町1-5
TEL: 075-703-5905 Email: IECC@kpu.ac.jp